

幕末期の西北海岸地域

— 小泊村磯野家文書の分析を中心として —

坂 本 寿 夫

はじめに

本稿は小泊村^{（ことまわむらしたまゑ）}下前（北津軽郡小泊村）の廻船・酒造資本家磯野家に
関する証文類などから、同地域における十九世紀中期の漁業・漁民生活
の一端を考察し、青森県西北海岸地方の漁業の実態などについて言及す
ることを目的とする。

これまで、青森県の近世水産史研究は『青森県水産史』^①に代表される
ように、八戸沖のイワシ漁、日本海岸におけるニシン漁、八戸から脇野
沢、平館沖にかけてのタラ漁、及び県域一帯の俵物生産や、内水面漁業
では岩木川におけるサケ漁などに関する諸史料が収録され、貴重な論考
が展開されてきた。さらに、桜井冬樹氏は『西浜往来』^②の中で、青森県
西海岸地域の深浦く鯉ヶ沢く十三湊辺に至る歴史を概観するとともに、
浦々で繁栄した廻船問屋や漁業の様子や、俳諧の受容などの文化史につ
いて詳述している。

このように、県水産史については好著がいくつか存在はするのである
が、研究史を見るとその量は決して多い訳ではなく、むしろ農村構造や
農民生活史といった分野に比べると過少の感をまぬがれない。また、漁

業史といってもそれは主に俵物生産にかたよった傾向があり、漁村や漁
民像の探求を直接的な目的としたものではない。さらに、浦方において
とりあげられている主な課題は、青森の廻船問屋滝屋伊東善五郎家のよ
うな資本家であり、それは水産史というよりは海運史ないしは経済史の
文脈で理解されるべきものである。^③

漁業や漁民の歴史の実像は三方を海に囲まれている本県としてみれば、
概ね乏しいとしかいえない状況であった。その原因には史料の存
在状態が大きく影響しているといえよう。つまり、浦方文書の欠如ない
しは収集の遅滞が漁村研究にとって大きな障壁となっていたのであり、
いきおい、海岸部の分析は廻船問屋や俵物生産など、史料の閲覧が比較
的容易な部分にかたよるざるをえなかったのである。

平成十三年度に筆者が勤務する青森県立郷土館では、小泊村磯野家の
蝦夷錦を展示することができたが、同時に多数の証文類、書簡類、帳簿
などを整理する機会を得た。^④特に漁村部のひとつの家から三五〇通以上
の証文が出てきたのは希有のことであり、後述するように抵当に網や大
釜・船などの生産手段が設定されていることは非常に興味深い。そこで
本稿では主に証文類や藩庁文書の分析を通して同家の経営と漁民の生活

実態、及び漁業に関して考察することとする。磯野家の経営詳細については『小泊村史・中巻』⁽⁵⁾等が多角的に述べており、小稿はその足下にもおよばないが、小稿では特に証文類の整理に重点を置き、同家の特色につき言及することとする。なお、表は巻末に掲げたので、最初にその旨了承願いたい。

一 小泊村の地勢と磯野家の成立

小泊・下前村は日本海に面した津軽半島西海岸北方に位置し、約一〇キロメートル南には十三湖が、同様に北には半島の突端龍飛岬^(たつひ)がある。集落は概ね岩礁の多い海岸部と、険峻な岩山の間に立地し、可耕地は少ない。藩政時代には金木新田組^(かなぎ)に属し、南隣の脇元・磯松村（現北津軽郡車力村^(くるりき)）などと密接な関係を保つてきた典型的な漁村といえるが、小泊村には大小の船二五艘ほどが出入りできる湊があり、若干の交易が可能であった。

明治初年に小泊・下前両村は五大区九小区に編入されたが、当時の村況を『新撰陸奥国誌』第三卷⁽⁶⁾は次のように記載している。小泊村は「村居は海に沿て市街をなし、長秋の際船出入し、出港には米穀・酒・醬、入港には干魚・油・砂糖・荒物等にて商客輻輳し、港内家数二百八十四軒、…当村商工の他は農耕を専し、山に薪炭檜材を采り野に牛を牧し、海に石決明（鮑）・ワカメ・海苔あり、又雑魚多けれども一村の用十分の一に足らず、依て男子多く北地に渡って遠役すること前の村々の如し」。また、下前村については「本村の西十八丁にあり、村家は山手より海際

に連て百七軒、東北の方は山、西南の方は海にして田少し、畑多けれども土地饒确にして作得鮮く、海は石浜多く加藤サメ（フカ鯨^{はぜ}の方言―注筆者）海苔・ワカメ・石明決を采り、又雑魚あり、壮丁は北海道に傭作すること本村のことし」とある。

つまり、両村ともに険しい山地が迫った海岸部に立地し、土地生産性は極めて低く、漁業は鮑・昆布・海苔・鱧などの他は不振で、生計を立てるには足りない。不足を補うために蝦夷地への出稼ぎが盛んで、湊の立地により米・酒・油の積み出しや魚介類の加工品・砂糖・荒物等の搬入により利益を生み出さざるを得ない土地柄であった。

この下前村で繁栄したのが磯野家であるが、次に同家に伝わる家伝⁽⁷⁾などによりその由来を確認していこう。家伝では同家の先祖は近江国佐和山城主磯野秀昌で、天正元年（一五七三）に一門の金六郎秀勝が播磨国姫路に居住したとする。その後、八代目の金兵衛が安永五年（一七七六）に小泊村、後に下前村に居住し、丸木船で地元のカトウサメ（カドサメとも称す）漁を始めた。つまり、磯野家は津軽の地付きの漁民ではなく、一八世紀後期に他国より移住してきた家であると思われる。

磯野家の繁栄の基礎を築いたのは続く九代金兵衛（文化二年（一八〇五）生・万延元年（一八六〇）没、後に六兵衛と改名し、第一〇代当主に代替わりしている）の代であり、彼は「長年松前蝦夷地鯨漁場の事に力め村人を鼓舞して盛大に赴かしめ、春漁して夏末に帰村し、自山野を開き、牛馬を牧し」て、屋号を「播磨屋」・家印を令（イゲタニ）としたとされる。ここで注目すべきは、金兵衛が地元の漁業によって財を成したのではなく、蝦夷地の漁場へ労働力を提供することによって家勢を

高めたことであり、この経営は以後も継承されていた。

弘前藩庁日記（以下、国日記とする）などに公的な記録が確認されるのは金兵衛が代替わりして一〇代六兵衛となった後である。すなわち、嘉永七年（一八五四）二月一日に藩は下前村六兵衛以下十一名の御用達加担商人を任命したが、その理由は、近年膨張する一方の軍用手当金に對して、今までは御用達商人でなんとかまかなってきたが、それも限界であり、「此節柄不融通之場合、兎角人数不足ニ而ハ程能集金も相成兼御急速等之節ハ確と御手支之儀も可有御座」として、当分のうち御用加担を申しつけた。⁸このことは「分限元帳（嘉永四年改）」からも確認がとれる。すなわち、「御用達加担」の項目に「下前村播磨屋六兵衛」の名前が記されており、名前の上に「磯野と成」と記載されていることから、恐らく御用達加担に任命されたと同時に磯野姓を名乗ったと思われる。嘉永七（安政元）年はペリーの再来日によって、幕府も日米和親条約締結を余儀なくされた時期であり、弘前藩に対しても一層の蝦夷地警備負担が求められた。六兵衛が藩政に取り込まれた背後には激変する世界情勢が大きく影響していたのである。

このことは当時まだ現岩木町の賀田に店を構えていた豪商金木屋又三郎の日記に正確に記録されている。又三郎は「金木屋日記」安政元年（一八五四）二月七日条で六兵衛らの取り立てにつき「アメリカニ付御物入も多く調達金被仰付候ニ付人数増ニ相成候よし」と、的確に表現している。また、御用達および加担は「⁹新古共廿人ニ相成、調達今ニ何程被仰付候哉、不相分候」と、財政事情の厳しさを心配している。結局、二月十四日には二十人の者たちへ計一万五〇〇〇両の賦課が行われ、六

兵衛は青森の伊東善五郎、鰯ヶ沢の月永長兵衛らとともに八〇〇両を賦課された。御用金の最高割当額は松山長左衛門・今村九左衛門への一二〇〇両ずつであったが、又三郎の記録によるとこの時、「割合大ニもめ合候よし」とあり、御用達らも紛糾した様子がうかがえる。

ところで、「金木屋日記」の中には播磨屋の記事が散見される。当時、同家では以前の名前である金六郎から、自家を「播金」と称していたが、例えば安政元年九月三日条には「播金」につき次のように見える。すなわち、先日下前村で出火があつたが、これは六兵衛の息子が鴨を鉄砲で撃ちに行き、火縄をつけたまま納屋に忘れたからである。火事で二七軒が焼失したが、磯野家では見舞いとして各戸に網代を一〇両ずつ配り、隣家には特に三〇両を出し、総計三〇〇両の出費にものぼったという。¹⁰

また「播金と申者ハ近來ニ出来分限なり、松前場所へ仕入致毎年二千両ソツ儲持参致候由、小泊ニモ出店有之候由、十三能登屋之酒屋も仕入致居候由、彼是音ニ聞得候よりは金持ニ有之候由、昨年旧冬御用達被仰付、調達金も被仰付候者なり、他所ニ出で儲け来候儀、宜敷商人なり」と磯野家の繁盛ぶりを伝えている。これによれば同家の経営基盤は松前の漁場仕込みであり、その他にも船便の都合がよい小泊村に出店があり、九浦のひとつ十三町でも酒の仕入れに従事していたことが分かる。実際、家伝では六兵衛が長男金蔵に下前村の財産を、次男兵助に松前・江差の財産を、三男六助（後に金六郎と改名）に十三町の酒造一切の財産を分与したとある。さらに、又三郎が他国に出て儲けるのは良い商人であると認識していることは、積極的に商人も藩の枠を越えて活動すべきであること、そうすれば巨利が得られることなどを念頭に置いた表現である

う。幕末期には弘前藩でも「ひと・もの・情報」が広域に交流していたが、磯野家の経営もまさに時代の気風に満ちていたのである。

その後、六兵衛は安政四年（一八五七）に御用達本役に昇進し、万延元年（一八六〇）九月に病死した。「分限元帳」によると、同年十一月十四日に一〇人扶持で息子の磯野金蔵は御用達に任命されており、一代当主として一族を束ねることとなった。¹⁵

金蔵の代には戊辰戦争による莫大な軍費上納が弘前藩より課せられたり、明治三年（一八七〇）の埴田法により田地一六町歩余の強制買上げが命じられたりと苦難の連続であった。また金蔵に男子がなかったため、娘婿幸之助が二代当主となったが、これも子供に恵まれず、一三代当主は一〇代六兵衛の三男金六郎が努めた。よって明治時代の磯野家は金蔵・幸之助・金六郎らによって維持され、金六郎の三男定繁は北海道美国（現美国郡美国町）へ移住し、漁場経営にあたっている。

以下は紙面上割愛するが、磯野家は下前村を根拠として、小泊村・十三町・松前・江差に廻船・酒造・漁場仕込みなどを手広く営んだ資本家であり、近代になっても密接に北海道と関連して家勢を保ってきたのである。

二 漁場仕込み関係の証文分析を通して

磯野家が蝦夷地の漁場仕込みによって財を成し始めたのは、前述のように六兵衛がまだ金兵衛と称していた時期であり、さらに一〇代六兵衛と改名して最盛期を迎えるのだが、同家では具体的にどのような経営が

展開されていたのだろうか。まず最初に表1から証文の全体像を概観し、次に播磨屋に宛てた証文をいくつかあげ、実態を考察していく。

筆者が整理した磯野家に伝わる証文類は全三五四通であったが、表1はそれを年代別に区分したものである。これを見ると一番高い割合を示しているのは天保期の二一・五%であり、次は安政年間の一六・四%となっている。六兵衛は文化二年（一八〇五）の生まれであるから、天保年間には三〇歳代の働き盛りであった。この天保年間から六兵衛が死去する万延元年（一八六〇）までの証文の全体に占める割合は五四%となり、これに元号が明記されていないもので、六兵衛宛てになっているものを加えると割合はもっと増える筈である。また、表2は証文類を宛名別に分類したもののだが、それでも六兵衛宛てが一九一通（五四%）と半数以上を占め、いかに彼の時代に貸借や売買が盛んに行われていたかが判明する。ただ、同人宛て証文の中には没後の年紀も見られ、この点で矛盾しているが、一方で単に「播磨屋」・「イゲタニ御印」などもあるものの中に同人宛て証文が含まれている可能性を考えれば、半数以上が六兵衛時代の証文とするのに無理はないだろう。なお、表の中に久右衛門という名が見えるが、この人物については家伝や家譜にも見えず、今の所不明である。

ただ、証文の数だけに注目して同家の経営実態を論ずるのは早計であり、具体的な内容は別に検証されねばならない。六兵衛が意を注いだとされるのは蝦夷地の漁場に行く人々に対する仕込みであるが、それを証文よりまとめたのが表3である。これによると、宛名が六兵衛になっている漁場仕込みに関する証文は一二四通であり、文政期より漁民に米金

などを貸し付けていることが分かる。当初は引当を設定していないので、証文にある通り元利は場所での取荷物（漁獲物等）で決済したのでろうが、天保年間になると盛んに引当（担保）を取るようになり、その多くは漁具であることが判明する。下前村や周辺の漁民や農民たちは盛んに六兵衛に借財を申し込んだのである。当該期の主な引当をみると、鯺網三九・網三〇・図合船（二く三人が乗り組む小型漁船で、沿岸漁業や諸荷物の受け取り、小廻しなどに用いられた⁽¹⁶⁾）・磯船（多くは平底の小型船で、磯漁や河川での廻船に使われた）一・碇八などの漁具が注目されるが、その他にも建家や家屋敷・畑などの不動産や、場所で消費する酒・米なども見られる。さらに、証文の中には返済ができない場合は自分や近親者を身売りを許容している例もある。

このような漁場仕込みは続く嘉永・安政年間になつてもさらに旺盛に行われた。六兵衛が漁民たちに融通した金額は嘉永年間で一七件・五六〇両余、安政年間では三二件・一六五四両余と銀三貫八三二匁に登っている。当然、引当の規模・種類もそれにつれて拡大し、船や網の種類も三羽船（サンパ船、鯺・鯺漁などに使われた漁船で、船長は概ね三間・五間のものが多かった）や鯺網・建網などが見られるようになり、鯺・鰯などを加工する際に使う金や板藏も差し出されている。

表では六兵衛が没した後の証文についてもまとめているが、文久・元治年間および明確な年紀が入っていないものをみても、漁場仕込みは盛んに行われており、それは磯野家の経営を支えるひとつの柱であった。

では次に実際の証文をいくつかあげて、漁村部における証文の特色を考察する。

【史料1】

借用申金子之事

一、金貳拾兩也、但此引当テ品左ニ

あみ 貳拾五はなし

はへ縄 拾八枚

三葉 老艘

家木 貳百八拾本 但檜貳尺五寸より尺角迄

家屋敷共

右ハ来ル寅年鯺場為仕込段々願之上貴殿方より只今慥ニ借用申処実正御座候、尤返済之儀ハ場所より取荷物ニ而元利取揃へ急度返済可仕候、若不漁ニ而表之通返済相成兼候節ハ前書引当テ品ニ而無相違御渡可申候、引当テ品ニ而御入用無御座候節ハ右引当品受人立合之上売払候而も急度返済可仕候、夫ニ而も埒明不申候ハハ受人之者ニ而無相違弁金可仕候、何れニも貴殿へ少も御苦勞御損分相懸申間敷候、為後日之金子借用証文如件、

嘉永六癸丑年十月

本人 磯松村 四五兵衛 印

受人 同村 権九郎 印

（以下五名略）

播磨屋六兵衛殿
能登屋勘太郎殿⁽¹⁷⁾

【史料2】

借用申金子之事

一、(金額記載なし)

但両替

右之金子唯今不叶入用ニ付、儘ニ受取借用申處相違無御座候、尤返済之義ハ来酉六月中場所表ニおいて取荷物ヲ以急度返済可仕候、万一返済相成兼候節ハ鯺網廿放・私并弟共雇ニ身ヲ売候而も急度返済可仕候、其節ハ一言之子細申間敷、御損分御苦勞相掛申間敷候、後日為念借用手形如件、

受人 脇元村 弥三郎 印

受人 右同 幸助 印

本人 右同 喜右衛門 印

嘉永元戊申年十二月 播磨屋金助殿(後略)⁽¹⁸⁾

【史料3】

借用仕申金子之事

一、金貳拾五両也

正金子

右ハ私義要用ニ付貴殿方より只今儘ニ借用申所実正ニ御座候、尤返済之義ハ場所表取荷物ヲ以江指表ニ而勘定可申候、其節勘定相成兼候ハハ私手船諸道具共ニ相渡シ可申候、若シ海上ニ而も有之候ハ私家・舩ニ而も相渡シ可申候、後日為念仍而如件、

受人 勘太郎

本人 勘六

嘉永四辛亥十二月 播磨屋六兵衛様⁽¹⁹⁾

史料1~3はいずれも蝦夷地の鯺場所に出かけるための支度金を播磨屋から借用した証文だが、借り主は磯松村・脇元村や地元の小泊・下前

村の漁民・農民と思われる。史料2には借用金額が記載されておらず、宛名が播磨屋金助と、実在が確認できない名前になっているので、書き損じかもしれない。史料1では二〇両の借用に対し、担保は網二五放・延縄一八枚・三羽船^{さんば}一艘・櫓の家材木二八〇本・家屋敷が設定されており、元利の返済が不能な場合はそれらを譲渡する旨が明記されている。また、史料2では抵当として鯺網二〇のほか、前述したように借り主の喜右衛門だけでなく、弟までもが「身ヲ売」ることを承認している。史料3でも抵当に手船・諸道具、さらに借り主の勘六が稼ぎに出て不在の時は家・身体でも返済するとしてある。

このような返済についての諸条件は、農村部の借用証文と比較すると非常に厳しいものと言わざるをえない。農村部の場合、困窮した百姓が田畑を永代売りしたり、質地に出したりしても、それは必ずしもその百姓と耕地の関係が断絶することを意味しない。多くの場合は永代売りとともに百姓は小作人に転ずるのが一般的であり、自作していた時と比較すれば利益は少なくなるものの、小作料で生計を立てる道は十分開かれていた。また、農村慣行でも小作人の耕作権はたとえ地主であつても否定することはできず、理由のない小作人の追放は禁止されていた⁽²⁰⁾。

農民に比べて漁民の場合は抵当に入れる耕地を持たないため、再生産手段の船や網・道具などを担保とするしかなかったのだろうが、それらを失えば彼らはせいぜい漁場の雇用労働力に転化せざるをえなくなる。まして、家屋敷まで抵当にしたり、身売りを条件にした場合は、自分の村に帰ってこれなくなる事態を本人は十分認識していたはずである。実際、史料3で勘六は二五両を借りているが、これは一介の漁民が借りる

現金としては大金である。それでも漁民たちが磯野家より米金を借用した訳は様々に考えられようが、ひとつには蝦夷地の鯨御殿に象徴されるように、漁業は農業よりも投機性が高く、多額の借財を負つても大きな利益に恵まれる機会が多かったこと、もうひとつには次節で述べるように、地元の漁業や生業で生計を立てようにもそれが無理であったこと、などがあげられよう。

以上、磯野家の証文を分析すると、天保期を画期として漁場仕込みは拡大の一方をたどり、漁民の中で同家のような富裕層と、漁具や家屋敷を喪失する貧民層に階層分化を起こしている様子がうかがわれる。

三 幕末における津軽領漁業の実態

前節では漁場仕込みの実態を考察したが、漁民たちが大きなリスクを負いながらも蝦夷地の漁場を目指したのは、地元での生業が極めて不振だったことが原因として考えられる。例えば、小泊周辺の特産とされた鮑・海鼠など、いわゆる俵物生産で漁民たちは生計を支えられなかったのだろうか。

津軽領の俵物生産に関しては、荒居英次氏がすでに詳しく総括している⁽²⁾。つまり、幕府が長崎の町年寄久松善兵衛を頂点として問屋商人による独占支配を確立させた延享元年（一七四四）当時、弘前藩の煎海鼠生産は三万斤で、品質は十番（最上級）・九・七・三番までの各ランクに散らばり、やりようによつてはまだ増産が見込める有力産業であった。また、鮑は最初は生息できる岩礁が少ないことから藩の請負高が定めら

れなかったが、文化二年（一八〇五）になって三〇〇〇斤が請負高とされ、品質は概ね良好であった。藩は海鼠・鮑の集荷のため天明四年（一七八四）に津軽惣問屋支配として青森の商人竹野屋与次兵衛を任命し、その配下に支配問屋二、下請人二人を置いて二〇カ浦の集荷に当たさせた。漁民への仕込み金として長崎から銀四貫二五〇目が竹野屋に貸し出され、下請人を通じて漁師たちに配られたが、これに対して竹野屋の買上価格は陸奥湾産煎海鼠で一斤一八六文、二一〇文、鰯ヶ沢産が一斤一七四文と非常に安い値段に設定され、長年据え置かれていた。後年、万延元年（一八六〇）に箱館で煎海鼠の自由な相対売りがなされた時、一斤一貫三三〇文で取り引きされており、それに比べると六七分の一以下にしかならなかったのである。まして、請負人が個々の漁民より海鼠を買い入れる時は一斤につき一二文も安く仕入れたため、漁民たちは生産意欲を全く喪失し、中には仕込み金を受け取って返済しない者も多数現れた。

そのため竹野屋の資金繰りは悪化の一途をたどり、ついに享和二年（一八〇二）には長崎の俵物会所に莫大な借財をつくった罪で青森町所払い・家財欠所処分となった。こうした問屋商人の破綻はそれ以前から全国的規模で進行していたため、幕府は天明五年（一七八五）には普請役を全国の諸浦に派遣し、事実上幕府役人による俵物の直接集荷の態勢が整備されたが、買上価格の改善を伴わなかったため、集荷は全く促進されなかった。弘前藩の総支配問屋は竹野屋の後、天保四年（一八三三）に青森の米商人長内屋寛兵衛とされたが、経営を引き継ぐ段階ですでに約一一〇〇両の借財があり、これを解消できないまま天保十一年に

は長内屋も破綻し、総支配問屋の座は金沢屋忠左衛門に継承された。

このように、俵物生産失敗の最大原因は異常に安い買入価格にあった。そのため、たとえ地元で採れてもそれが全国的流通網に乗ることはなかったし、密輸が横行した。嘉永六年（一八五三）に津軽産の煎海鼠を積んだ廻船が薩摩国深浦で摘発されたのはその一例であるし、同三年に幕府普請役大田梁助が平舘に泊まった際、宿舍の膳部に鮑料理が出されたり、梁助が地元の漁婦から鮑を買うことができたという事実は、俵物生産のちぐはぐなあり方を示している。

弘前藩でも幕府の手前上、俵物集荷については熱心な指導を漁民に加えた。嘉永七年（一八五四）三月の勘定奉行稟議によると、浦々からの漁獲高は全く不振で、煎海鼠は油川組古川村（現青森市古川）から宇鉄（現北津軽郡三厩村宇鉄）までの五、四、力浦で割当漁獲量が九六〇〇斤の所、嘉永五年十二月から同六年十一月の一年間でわずかに七一〇斤しか水揚げがなかった。また、千白鮑の水揚げも割当の半分以下であり、このため藩では岩崎・金井ヶ沢・深浦・蟹田・小泊などの浦方に下請人を一四人増加して増産を促すこととしたが、小泊村では「小泊・脇元・磯松・下前村之儀ハ鮑之外漁事一切無御座」としており、集荷は困難を極めていた。さらにたびたび海鼠・鮑の市中売買を禁止する布令が出されていたにもかかわらず、両品が日市で取り引きされることも珍しくなく、藩はこうした現象を「兎角漁師共働方怠」け、「仕癖相止不申」と表現しているが、根本的問題は俵物漁が漁師にとって全く割に合わない仕事でしかなかったからである。勿論、磯野家が俵物生産に関与するはずもなかった。

では、幕末期の弘前藩では俵物以外の漁業は同様に不振であったのだろうか。表4・表5は元治元年（一八六四）に藩が調査した九浦の水産業関係の戸数と船舶数であるが、内陸部の碇ヶ関と該当職がない大間越のほかは、各地に漁師・網師・船水主・船問屋・魚油小売などの商売が成立しており、船舶数も丸木船・秣刈船などの小型船舶を含んでいるとはいえ、合計七一九艘を数え、決して少ないとはいえない。これに表以外の浦々で使用されていた船を加えると一〇〇〇艘を越えるのは間違いないであろう。また、鰯漁師・引網漁師も含めた漁師の数に注目すると、青森では一九八軒、鰯ヶ沢二〇五軒、深浦三軒、十三町二〇軒、蟹田八軒、今別二三軒であり、鰯ヶ沢と青森が群を抜いて多く、青森では全戸数の一〇％が、鰯ヶ沢の場合は漁師だけで全戸数の二五・七％が漁業従事者となる。それに船大工や船水主などの船舶・海運労働者を加えるとかなりの数にのぼるのであり、青森と鰯ヶ沢周辺では盛んに漁業が営まれていたようである。

事実、天保七年（一八三六）・同九年・嘉永元年（一八四八）・元治元年（一八六四）には鰯ヶ沢方面で鰯が群来り、特に天保七年の時は中家より下家の収入が一〇〇〇両にも及び、町中が活気にあふれたという。さらに、天保三年（一八三二）には金井ヶ沢で鰯が三万本も獲れ、その他、鰯・ハタハタ・カレイなどが西浜で豊富に獲れた記録が残されている。よって、前節でみたように、磯野家で建網や延縄などの網類や船を担保に取っていることは何ら不自然なことではなく、小泊村周辺でも盛んに漁業が行われていた証左である。

しかし、それでも磯野家が漁業で家を維持しようとしなかったのは、

漁業が極めて自然条件に左右されやすい不安定な産業であったこと、また、たとえ豊漁であっても俵物同様に魚値段の低価によって安定した利益をあげがたいからであった。それよりも恒常的に労働力を必要としていた蝦夷地の漁場に向く漁民たちに仕込金を貸し付けたり、場所経営・廻船事業などを行った方が安定的な利益を確保できたのである。磯野家の経営の詳細については小稿ではとても総括できる余裕がなく、『小泊村史・中巻』を参照していただきたいが、同家では手船大神丸・永吉丸や雇船永徳丸・永福丸を駆使して活発な廻船商売を行い、六兵衛が嘉永元年（一八四八）に十三町の伊右衛門より代銭五〇貫五四二匁で酒屋株と酒造に関する一切の不動産を手に入れて、手広く酒屋家業を営んでいたことなどが同書では述べられている。しかし、いずれにせよ磯野家では八代目金兵衛の後、早々に漁業より脱却して経営基盤を場所仕込・廻船業に経営基盤を移行させており、地元の漁業に資本を投下することはなかったのである。

四 地主としての磯野家

磯野家の証文を整理すると、漁場仕込関係の証文と同時に多くの田畑・永代証文が存在することが分かる。つまり、同家は水産関係だけでなく、広大な耕地を有する地主の側面も濃厚に有していた。表6は漁場仕込関係以外の証文の一覧であるが、これによると磯野家の耕地・山林集積は天保年間より金額が増加し、嘉永・安政年間には計一八四両余、銀二〇貫七八四匁余とピークに達していることが判明する。全七三件に表れて

いる集積田地は一七町九反八畝二歩で、このほかにも畑や杉山・家屋敷などが同家の所有となったと思われる。

証文の譲渡人住所を見るとその大部分が下前村に近い車力・牛潟（現西津軽郡車力村）・富泡（同）・豊富（同）村であり、ここから判断すると磯野家は周辺の新田村一帯の農民に金融活動を行い、耕地集積をしていったと分かる。しかし、他方、同家でまとめた田方人別覚帳や田方出作証文によると相当数の田方は金木新田蒔田村（現北津軽郡金木町）・芦野村（同）で所有しており、こちらの方が中心であった。前述したように小泊村辺は耕地に恵まれなかったため、田方の集積にあたって同家では周辺の新田村の耕地（但し、こちらも地味は決して良好ではなく、多くは十三湖周辺の低湿地を開発して成立したものである。）と金木方面に分散させたのである。

同家の集積耕地の全面積については部分的な史料による推測しかできないが、まず、二六町歩以上の田地を持っていたことは確実であろう。すなわち、明治三年（一八七〇）十月に弘前藩は帰田法を断行したが、これに際して磯野家では一六町歩余の田地強制買上を受けている。²⁷ 帰田法は戊辰戦争終結後、新政府が主導する藩政改革の結果、減少した藩士の家禄削減を補填する目的で行った強権発動であったが、一〇町歩の田地だけは地主に留保されていたから、少なくとも明治初年の段階で二六町歩の田を持つていたことになる。また、明治八年（一八七五）五月には磯野家は蒔田村に所有していた田方一三九人役（九町二反六畝余）を処分しようとしており、²⁸ ここからみても幕末期に同家が所持していた田方は二六町歩〜三〇町歩程度と思われる。ただ、一口に三〇町歩といっ

てもそれはかなりの土地所有であり、同家が廻船業や場所仕込みなどを通じて得た利益をいたずらに耕地集積に投じたものではないだろう。というのは、蝦夷地への場所稼ぎに行く人々にとって飯米の確保は重要な関心事であり、これを自家で賄えとなれば非常に好都合であり、そのため磯野家でも鋭意耕地の集積に意を用いたのである。

鯉場稼ぎや漁場への飯米移出については藩でもたびたび指示を出して規制している。天保の大飢饉の後、藩内には復興すべき田畑が随所にあつたにも関わらず、農民たちはすぐに現金を得られる漁場に向かつたため、農村労働力を確保する必要上、藩は湊口の改めを厳格にして不正渡航をくいとめようと努めた。また、飯米が蝦夷地に大量に流出すると地元での消費分が不足する心配があり、これについても総量を規制していた。小泊村の問題につき国日記の記録を見ると、文政二年（一八一九）十二月に小泊・脇本両村では田畑が不足していることから、松前表で漁師働きに出る者が多く、その数は一〇人乗り漁船で三〇艘にもなるといふ。それまで飯米は一人につき二斗ずつの持ち出しが許されていたが、とてもそれだけでは足りず、松前の雇主から味噌などを借用していた。それには三割の利息がつき、帰帆の節に干肴で相殺され、村人の大きな負担となっていた。よってそれを解消するために、試みに一年間だけ飯米は一人一石、味噌・酒は願いの通りの移出を許すこととされたのである。⁽²⁹⁾藩によるこの措置は次第に拡大していったらしい。弘化四年（一八四七）十一月では小泊・脇本・下前村ほか四力村の者が飯米は三俵（一・二石）でも足りないので、四俵にしてほしいと嘆願した所、藩はこれを却下し、再計算して三俵二斗の積み出しを認めている。⁽³⁰⁾

ところで、飯米の積み出しは一俵は無税であったが、嘉永四年（一八五一）十二月の規定では一俵につき二文目五分の役銭が湊口で徴収された。⁽³¹⁾勿論、その他、漁場で必要とされた酒や味噌、油等々の諸品については運賃がかかったものであり、手船でこれらを運べるとなれば商売の上で有利となるのはいうまでもない。磯野家の土地集積や多角的経営は全てが場所稼ぎにとつて必要不可欠のものであり、蝦夷地との活発な交易を通してそれらはいかに役立てられた。

まとめとして

下前村磯野家は一八世紀後期に金六郎が移住して成立したが、天保・嘉永・安政年間に次代の六兵衛が一代で財をなした家であった。六兵衛は早々に地元漁師稼ぎから脱却し、蝦夷地の鯉場稼ぎに進出して、そこで得た利益を漁民や農民に仕込金として融通することで拡大再生産を続けていった。三五〇通を超える同家の証文の宛名の半数以上は六兵衛であり、彼の成長が顕著となった天保期には小泊村辺でも漁民・農民の間に階層分化が進行していた。六兵衛は嘉永七年（一八五四）に御用達加担に任命され、播磨屋から磯野と姓を定める身分に上昇させていくが、このころから安政年間に磯野家の極盛期となったと思われる。天保の大飢饉により農村はひどく荒廃していたが、米を生産することが困難な漁村部では多くの労働力人口が蝦夷地へ流出し、階層分化の速度は農村部のそれよりも速かったのではなからうか。この点に関しては単に小稿が行った分析だけで結論づけることはできず、農村部との詳細な比較によ

つてなされるべきことであり、後日を期したい。

小前の漁民が生計を維持できる可能性に関して、例えば俵物生産についても研究史をまとめたが、結局は幕府が定めた異常に安い公定価格のために、船舶数は十分あったにもかかわらず、漁民は生産意欲を喪失し、磯野家のような資本家もそれに投資することはなかった。俵物以外の沿岸漁業についても、随所に大漁の記録が残っているのに、磯野家は廻船・漁場仕込みなどを経営の主軸にすえ、沿岸漁業に参入することはなかった。

さらに、同家では蝦夷地で得た利益を耕地集積のために投下したが、恐らくそれは単に地主経営を目指した結果ではなく、漁場へ積み出す飯米を確保するためだったと見られる。同家の土地が周辺の諸村だけではなく、管理が難しい離れた金木方面にまとまって所在していたことは、その推論の裏付けである。

小稿では分析対象をほぼ証文類に限定したため、極めて限られた視点でしか論を進められず、残された課題は多岐に渡る。例えば、同家で営んでいた酒屋やその他の家業の規模はどの程度のものであったのか、明治期以降、同家はどのような経営を展開していったのか等々については様々な史料や文献をもとに今後も探求していきたい。磯野家の歴史をみることは単に個人的な家の分析することにとどまるものではない。小泊村は現在では津軽半島西北部の漁村であるが、幕末期には巨大な資本を生み出し、それを駆使して自在に津軽海峡を往来する資本家や、蝦夷地を目指す人々であふれていたのである。その歴史的意義を明確にするために同家の史料はより深く考察されるべきであろう。

付記

小稿は本来、恩師である青山学院大学教授沼田哲先生の還暦記念論文集に掲載されるべきものであったが、当時は多忙を極め、また筆者の怠惰から提出することができなかった。沼田先生にはこの場をお借りして心より不徳を謝し、本誌への掲載を許諾くださった長谷川成一先生に感謝する次第です。

注

- (1) 平成元年(一九八九)、青森県編
- (2) 一九八八年、北方新社刊
- (3) 廻船問屋に関する論考については、肴倉弥八「錢屋五兵衛と青森(一)」「同(三)」「うとう」第三九号〜第四一號、一九五七年・小笠原二郎「錢屋関係書状(「滝屋文書」所収)について」(「国史研究」第四七号、一九六七年)・小笠原二郎「錢屋関係書状について」(「国史研究」第六〇号、一九七三年)などを参照のこと。
- (4) これらの史料は現在青森県立郷土館に所蔵され、受入番号(整理番号)を付して閲覧が可能であるが、一部痛みが激しいものはその限りではない。
- (5) 平成十年(一九九八)、小泊村刊。また、これとは別に磯野家文書のみを翻刻した『小泊村史 磯野家文書』(二〇〇一年、小泊村の歴史を語る会編)も刊行されているが、これには本稿が分析対象とした証文類は含まれていない。
- (6) 青森県文化財保護協会編『みちのく双書第一七集』昭和四〇年(一九六五)刊
- (7) 家伝については『小泊村史 磯野家文書』七頁〜一〇頁参照のこと。

(8) 「国日記」 嘉永七年二月一日条

一、勘定奉行申出候、近年不時臨時御物入多、追々御賦向御不足相立候得共、船手并御用達共先納調達等を以仮や御埋合御続方相成来候得共、昨今年之處ニ而御軍用御手当向旁莫太之御不足相立、既ニ当三月限ニ而御有金御払切、其余悉皆御借入金を以御間合候外無御座、是迎も治定御目当にも相成不申、然ニ御用達共之儀ハ御区国内之儀ニ付是非調達等も可申付奉存候得共、此節柄不融通之場合、兎角人数不足ニ而ハ程能集金も相成兼、御急速等之節ハ礪と御手支之儀も可有御座奉存候間、当分之内御用加担被仰付度、左候得ハ左ニ、

弘前 宮川久三郎・上野儀三郎・一野屋宇三郎・野村伊左衛門

浅瀬石村 鳴海永作・北山長次郎

舞戸村 備前屋長兵衛

濁川村 葛西幸七

中里村 加藤九八郎

下前村 播磨屋六兵衛

青森町 柿崎忠兵衛

右之者共五人扶持充被下置加担被仰付候様、尤御扶持渡方之儀御用達共並合を以三ヶ一渡被仰付候様、右之趣向々支配頭へ被仰付候様申出之通申付之、

(9) 弘前市立図書館津輕家文書・請求番号TK二八〇・三一―一六の第十

二

(10) 弘前市立図書館八木橋文庫・「金木屋日記」 安政元年二月七日条

(11) 右同・安政元年二月十一日条

(12) 右同・安政元年二月十六日条

(13) 右同・安政元年九月三日条

(前略) 先頃下前之出火、其処の分限者播金と申者之小屋より出候由、

右は同人三番目弟鴨へ鉄砲打候而右火縄小屋之中へ相忘置候より出火ニ相成、風烈シク廿七軒類焼致候旨、右之者共不残焼失、渡世ニ差支候ニ付前金播金へ相願網代金拾両ツツ出セ候由、其外ニ隣家難儀之者ニ付(中略)、礼金三十両ツツ遣候由、彼是三百両出金ニ相成候由、播金と申者ハ近来ニ出来分限なり、松前場所へ仕入致毎年二千両ツツ儲持参致候由、小泊ニモ出店有之候由、十三能登屋之酒屋も仕入致居候由、彼是音ニ聞得候よりは金持ニ有之候由、昨年旧冬御用達被仰付調達金も被仰付候者なり、他所ニ出て儲け来候儀、宜敷商人なり、

(14) 右同

(15) 「分限元帳」 嘉永四年改

御用達町人

右同(御用達商人加担)より

一、拾人扶持 年頭御目見得

万延元申九月十八日去ル九日病死

一、拾人扶持

万延元申十一月十四日拾人扶持被下置御用達被仰付候、

また、「国日記」万延元年十一月十四日条

一、磯野金蔵儀、拾人扶持被下置御用達被仰付之、

(16) 船の種類や用途については青森県立県立郷土館調査研究年報第一八集『青森県の漁撈用和船』(一九八五年)や『留萌市ニシン漁調査報告』(一九九五年、留萌市)を参照のこと。

(17) 受入番号一八五三―一六

(18) 受入番号一八五三―一七

(19) 受入番号一八五三―一八

(20) 農村部における田畑永代売りや小作慣行については、例えば『五所川原市史 通史編I』(一九九八年、五所川原市刊)第八章第二節「藩士

帰農政策と村落」などを参照のこと。

- (21) 荒居英次著『近世海産物経済史の研究』(一九八八年、名著出版刊)
所収「津輕藩における俵物の生産・集荷」

(22) 「国日記」嘉永三年五月二十二日条

一、青森町奉行申出候、俵物方役人仕向方案文下書伺差出候様被仰付処、
(中略) 此度ハ別ニ不申上旨附紙之通俵物役人へ之書翰案文左ニ
一筆致啓上候、向暑之砌御堅固被成御勤役珍重ニ奉存候、将又去
冬太田梁助殿御帰府之砌御談之俵物御取締并出進取計等之儀左ニ得御
意候、

一、梁助殿御帰府之節当領平館村小次郎方へ御止宿被成候処、鮑料理差
出候由、然ハ俵物方へ売上之儀を専務ニ不致、全体出不足之鮑右様料
理方ニ相用候儀、不埒之儀、并上磯ニ而鮑竈持参之女有之、右直段御
尋之上御買入御持参之旨、右様之儀重役へ相達候処段々吟味ニ相成、
右之者共重々締方被申付、以来右之儀無之様出情漁事之上白干ニ仕立
俵物方へ売上候様被申付候、(中略)

一、近年俵物出合不足之儀ハ第一領中凶歳後漁民不足ニ相成、殊ニ全体
諸魚とも不漁ニ相成申候、乍去俵物之儀ハ此末何れ出情漁事出増ニ相
成候様浦方支配頭へ嚴重被申付候、猶拙者共ニ而も与篤打合漁事出情
締方共嚴重可申付奉存候、左様御承知可被下候、此段可得御意如斯御
座候、追日暑氣折角御自愛可被成御勤候、恐惶謹言、(後略)

(23) 「国日記」嘉永七年三月八日条

一、勘定奉行申出候、俵物御締方、昨年嚴重被仰付候處、則年之儀ハ公
義請負高以上出増之旨、別紙調帳ニ御座候得ハ、平内領より多出増之
處より売上高相成候得共、御領分浦々より売上表平均仕候得ハ御定十
ヶ一ニも相当不申、自然不漁之儀ハ無拠候得共兎角漁師共働方怠候様
ニも相聞得、乍去昨年之通平内より多出増之節ハ子細も無御座候得共、

同所迎も漁事之儀ニ付増減も可有御座、請負高より過分相減候得ハ御
普請役通行之節是非御扱相生、若売出村所敷敷養議有之節ハ御領分之
買上不相当ニ付、色々御手数之儀も難斗ニ付、別紙へ夫々内点羽之通
向々へ被仰付候様、

一、海鼠并鮑売買御差留之儀、度々被仰付も御座候得共兎角心得違之者
有之、頃日ハ別而市中売買有之、然ハ何れ之浦より売出候哉、何分仕
癖相止不申候間、与得役筋へ見聞被仰付、申出之處ニ而無御用捨御締
方被仰付候様、隨而已後心得違之者無之様、郡奉行・町奉行并八浦町
奉行へも被仰付候様、海岸下役之者へハ私共ニ而申付奉存候、其外申
出書へ内点羽之通被仰付候様申出之通申付之、

一、金沢屋忠左衛門より申出、調書内点羽左之通、
久栗坂并野内・原別之儀ハ海鼠漁事相応之場所ニ付船割之上御定之通
急度売上候様、郡奉行并野内町奉行へ被仰付候様、野内町年寄俵物懸
合名前今ニ申出無御座候間、早速申出候様とも被仰付候様、

一、油川組古川村・宇鉄村迄五十四ヶ浦ニ而御定九千六百斤之處、一昨
年十二月より去十一月中迄七百十斤より売上無御座、近年格別不漁之
旨申出候得共、稼方ニ寄御定半分位ハ出方ニも可相成、乍去一通之被
仰付にてハ迎も出進ニ不相成候間、船割之上半分通ハ急度売上候様郡
奉行へ急度被仰付候様、

一、油川より宇鉄まで五十四ヶ浦ニ而漁船七百七十艘余御座候、老艘ニ
付五・六斤ツツ割合候得ハ前書之通都合仕候、

一、白干鮑之儀も御定高半分ニも相当不申候間、何れ共漁事之上請負高
へ相叶候様売上候様、郡奉行并深浦・今別町奉行へも被仰付候様、
一、赤石組御代官申出、

手代 吉田五郎兵衛
岩崎村下請 堀内市三郎

金井ヶ沢村下請 鴨野治右衛門

右ハ長崎俵物方懸合名前申出之通御聞届被仰付候様、左候ハ青森町奉行へも名前相廻置候様被仰付候様、

一、横内組御代官申出、

手代 原子小兵衛

原別村下請 庄屋惣次

久栗坂村下請 庄屋弥十郎

浅虫村下請 庄屋庄左衛門

右之通懸合申付候、尤久栗坂・浅虫村之儀ハ近年生海鼠不漁ニ而請負高分も年々売上候儀難相成候間、増減御座候分ハ兼而御聞届被仰付度旨申出之通被仰付候様、名前青森町奉行へ相廻置候様被仰付候様、船割之儀ハ調帳へ点羽之通被仰付候様、

一、後潟組御代官申出、

鉄吹小頭 工藤左吉郎

右ハ俵物懸合申付候、油川村より上磯通宇鉄迄割合漁事方被仰付、村毎ニ生海鼠・鮑漁事御座候儀ニも無御座、内真部村より宇鉄村迄ハ鮑漁事御座候得共、下磯ニハ一切無御座ニ付、漁船へ割合漁事申付候而ハ一同不服而已相成、出進之見居も無御座、自然漁場所ニ而漁事分俵物ニ相成可申旨申出、油川・後潟組之儀ハ村数ニ付懸合之儀ハ昨年被仰付候通、手代之内より名前早速申出候様、左吉郎儀ハ難被仰付奉存候、船割之儀ハ調帳へ点羽之通被仰付候様、

一、金木組御代官申出、

小泊村 太田半次郎

下請 小泊村卯兵衛

同村善六

右之通申付候間御聞届被仰付度、尤小泊・脇本・磯松・下前村之儀ハ

鮑之外漁事一切無御座、漸御献上丈ヶより年々相成兼候而、俵物方へ売上可申、余分無御座旨申出、御献上撰残有之筈ニ付右之分俵物方へ売上候様、懸合名前申出之通御聞届被仰付候様、左候ハ名前青森町奉行へも相廻置候様被仰付候様、

一、深浦町奉行申出、

町年寄 花谷善六

下請 若狭屋久左衛門

右之通俵物買入名前申出之通被仰付候様、左候ハ名前青森町奉行へ相廻置候様被仰付候様、

一、蟹田町奉行申出、

当町 久米助

右之者先年より下取扱罷有候旨、尤有船九艘御座候ニ付此節より為試漁船老艘ニ付十斤ツツ船割漁事方之儀共申出之通御聞届被仰付候様、町年寄懸合名前于今申出無御座候間、早速申出候様下請名前青森町奉行へ相廻置候様被仰付候様、申出之通申付之、

(24)・(25) 右同

(26) 西海岸での漁業や魚値段については『西浜往来』一七〇頁〜一八四頁

参照のこと。

(27) 拙編『弘前藩記事』三(一九〇年、北方新社刊)二四五頁、明治四年四月二十四日条に帰田法の際、田地の買上・献納に応じた地主らに藩は褒賞を与えたが、それには次のようにある。

四等之部 御菓子・御酒・御吸物

一、同十六町歩余御買上・推朱御香合 下前村ノ六兵衛

これからすると明治になつても磯野家では当主を六兵衛と称していることが分かる。

(28) 『小泊村史・中巻』三八四頁〜三八五頁

(29) 「国日記」 文政二年十二月二十八日条

一、郡奉行申出候、勘定奉行附紙申出候ハ小泊・脇本両村之者共、田畑不足ニ付年々松前表へ漁師働方ニ合、漁船三十艘十人乗ニ而罷越、沖糺米老人式斗宛積入被仰付候處、漁事中米・味噌不足故松前表銀主取組借受候得ハ、直段高直之上三割之利息払、帰帆之節干着を以返済相成、其身老人之渡世のみニ而難渋ニ付、入用分岡在所より買下、向地働中相用得申度候間、御印代上納之上積入被仰付度、(中略) 田畑不足之場所故飯料買下被仰付候得ハ右之内より船々出入糺米年中八十石余積入相見得候、左候得ハ右等買下飯料より問屋とも差出可申候、然ハ村方養育行届兼、殊ニ松前表逗留飯料用意相成候處より不実之取工等いたし、不締不得止事相聞得候、左候得ハ弥增人氣不宜候様ニ成行可申哉ニ奉存候、且御代官申立之趣ニ御座候得ハ願之通被仰付候節ハ村成立并御締等も相立候儀、不得止事相聞得候間、為御試来老ケ年は迄之糺米之外老人ニ付逗留飯料老石、并味噌・酒ハ願之通、湊口御定上納之上積入被仰付候様、(後略)

(30) 「国日記」 弘化四年十一月二日条

一、郡奉行申出候、金木組小泊・脇本・下前三ヶ村、并後潟奥平部・砂ヶ森・裴月・大泊四ヶ村之者共、鮭場所飯料三俵積ニ而ハ行届不申難渋ニ付、正月より六月中之處ニ而向地へ積出三俵式斗宛、爰元風待中飯料式斗積を以、老人ニ付四俵積ニ被仰付度旨、書面之通申出候得共、鮭場行之儀ハ別紙申出候通御座候、猶兼而申出一日八合積を以評議仕候處、何れ過分ニ而不益之儀も御座候間、四俵積之儀難被仰付奉存候、乍去前条月数申出之通ニ仕候得ハ飯料不定、難渋之趣も無余儀相聞得候間、其年ニ寄正月初方より二月ニ入出帆之節も有之候得共、帰帆も右ニ応可申儀ニ付、正月上旬より六月中之處ニ而大都百七十五日積ニ算当仕候之處、老石四斗位相当候間、以来老人ニ付風待中飯料共三

俵式斗宛ニ被仰付候様、(後略)

(31) 「国日記」 嘉永四年十二月二十九日条

一、勘定奉行申出候、松前鮭場行之儀ニ付別紙之通段々申上候處、右飯料米へ御役付之儀并湊口出帆為御締向々支配頭印形之差紙持セ候儀ハ不穩候義ニ而、又々別紙御返御座候得共、右ハ私共ニ而精々評議相尽、御締方申上候儀ニ御座候間、何れ沙汰申上候通早速御聞届被仰付度、尚又右之通被仰付候而下々何哉差支之儀御座候得ハ申出ニ寄又々沙汰仕可申上候通御仕向被仰付度奉存候、別紙相添申出之通、別紙左ニ、一、近来松前鮭場行弥被行海岸之者ニ不限新田岡在、其外よりも猥ニ多人数渡海、不得止事、御締崩ニ相成候ニ付昨年委細申上候而、是迄之人数積三ノ一通リハ為渡世渡海為致候様被仰付候處、即年之儀ハ夫々取支度も相整候儀ニ御座候得共、御差留被仰付候者共難渋之趣、色々御扱申出、無余儀當春之處ハ願出之通不残人数渡海被仰付候、然ニ段々穿鑿之上評議仕候處、昨年被仰付候通人数相減候儀ハ如何ニモ不穩、押而被仰付候而も又々昨年之通兎や角御扱可申出、数十年仕来之事ニ而今更迎も相止候儀ニ至り兼候義ニ相聞得、乍去近年之仕振此俵ニも難被差置奉存候間先一ト通御締向左之通被仰付候様、(中略)

一、右人数入用飯料米之儀ハ老人ニ付三俵積、内一俵ハ為糺米御役御免、余ハ老儀ニ付式文目五分立ニ而御役上納申付、其外諸色之儀ハ是迄之通御役御免積出申付候様、(後略)

(さかもと・ひさお 青森県立郷土館主任研究主査)

表 1 証文年代別分布

元 号	西 暦	数 量	%	元 号	西 暦	数 量	%
天 明 年 間	1781～1788	2	0.6	安 政 〃	1854～1859	58	16.4
寛 政 〃	1789～1800	0	0	万 延 〃	1860	11	3.1
享 和 〃	1801～1803	0	0	文 久 〃	1861～1863	25	7.1
文 化 〃	1804～1817	0	0	元 治 〃	1864	11	3.1
文 政 〃	1818～1829	18	5.1	慶 応 〃	1865～1868	12	3.4
天 保 〃	1830～1843	76	21.5	明 治 〃	1868～	49	13.8
弘 化 〃	1844～1847	12	3.4	元 号 な し		46	13
嘉 永 〃	1848～1853	34	9.6	合 計		354	100.1

表 2 証文宛名別区分一覧

NO	名 前	数量	%	証文の時期
1	久 右 衛 門	11	3.1	天 保 ～ 安 政
2	六 兵 衛	191	54	天 保 ～ 明 治
3	金 助	19	5.4	天 保 ～ 文 久
4	金 蔵	2	0.6	安 政 ・ 慶 応
5	六 助	18	5.1	安 政 ～ 明 治
6	金 六 郎	15	4.2	明 治
7	幸 之 助	9	2.5	明 治
8	磯 野 定 繁	3	0.8	明 治
9	下 前 村 播 磨 屋	2	0.6	
10	イ ゲ タ ニ 御 印	7	2	
11	そ の 他 、 不 明	77	21.8	
計		354	100.1	

表3 播磨屋六兵衛宛て証文一覧（漁場仕込関係）

年 代	件数	借入金	借入金 (銀)	そ の 他 の 借 用	引当（表中、労働力提供とは 本人・近親者が漁場における 労働を約束したことを示す）	借用 人数	保証 人人数	備 考
文政年間	6	132両 1歩2朱	2貫258 匁3厘			5	5	
天保年間	33		12貫732 匁9歩	酒13樽、 飯米1件	鯨網39枚、網30枚、諸道具 5、磯船1艘、図合船1艘、 碇8丁、建家1軒、家屋敷5 軒、船屋敷1軒、畑4件、労 働力提供4人、漆畑1件、長 板1件、切込家1軒、	42	12	
弘化年間	6	28両	2貫538 匁6歩		浜船1艘、屋敷1軒	6	4	
嘉永年間	17	560両 2朱	410匁 5歩	米4俵、 米1件	網33、釜8、延縄18枚、船6 艘、手船1艘、三羽船1艘、 諸道具2、家屋敷2軒、家財 産1件、家木280本	35	14	140両を六 兵衛以下4 名で貸した 1件を含む
安政年間	31	1604両 2歩	3貫 832匁	酒50樽、 米16俵	三葉船6艘、図合船1艘、磯 船1艘、はち1艘、ふつ1 艘、刺し網45枚、鯨網20枚、 建網1、網51枚、網・碇1 件、釜5枚、板蔵1軒、家屋 敷14軒、労働力提供2人、木 綿古手家業1	31	54	
万延年間	1	40両				1	1	
文久年間	9	337両 3歩	14貫797 匁1歩1 厘	金額不明 1件	網15枚、鯨網1件、諸道具1 件、家屋敷2軒	9	7	
元治年間	4	75両			建家1軒、屋敷1軒、帆掛け 船1艘	4	4	
不 明	16	518両 2歩	4貫531 匁6厘		網10枚、網1件、船1艘、船 1件、諸道具1、建網1件、 材木1件、米1件、場所1、 労働力提供1人	17	7	
合 計	123	3295両 3歩	41貫100 匁2歩			150	108	

表中、件数は面積・個数等が特定できないことを示す。

表4 九浦漁業・水産関係戸数一覧

町 名	家 業 名	軒 数	人 口	備 考
青 森 町	(総軒数・人口)	1,985	9,991	男4,968人、女5,023人
	長 崎 倭 物 取 扱	1		
	船 大 工	6		
	鰯 網 師	1		
	鱈 漁 師	1		
	魚 油 小 売	10		無役家業
	船 水 主	52		〃
	漁 師	196		〃
	松 前 通 商	1		〃
鰻 ヶ 沢 町	(総軒数・人口)	798	3,916	男1,825人、女2,091人
	船 大 工	2		
	引 網 漁 師	8		
	船 問 屋	15		無役家業
	魚 油 小 売	1		〃
	船 水 主	31		〃
	漁 師	197		〃
深 浦 町	(総軒数・人口)	299	1,366	男664人、女702人
	船 大 工	4		
	鱈 漁 師	1		
	引 網 漁 師	2		
	船 問 屋	9		無役家業
	船 水 主	34		〃
十 三 町	(総軒数・人口)	243	1,231	男619人、女612人
	船 大 工	18		
	引 網 漁 師	7		
	船 問 屋	3		無役家業
	船 師	13		
碓 ヶ 関 町	(総軒数・人口)	165	802	男408人、女394人
大 間 越 町	(総軒数・人口)	59	270	男125人、女145人
野 内 町	(総軒数・人口)	133	823	男407人、女416人
	松前鯉場廻直船頭	4		無役家業
蟹 田 町	(総軒数・人口)	121	717	男368人、女349人
	船 問 屋	2		無役家業
	魚 油 触 売	1		〃
	船 水 主	18		〃
	漁 師	8		〃
今 別 町	(総軒数・人口)	267	1,486	男753人、女733人
	船 大 工	2		
	船 問 屋	17		無役家業
	船 水 主	22		〃
	漁 師	23		〃

合 計 総軒数 4,070軒・人口 20,602人・家業戸数 710軒

*表では魚売・干肴・魚触売については省略した。

弘前市立図書館八木橋文庫「九浦町中人別戸数諸工諸家業総括牒」(元治元年)より作成

表5 元治元年九浦船舶数一覧

町 名	船舶種類	数	町 名	船舶種類	数
青 森 町	丸 木 船	123	十 三 町	渡 海 船	7
	漁 船	8		通 伝 港 船	31
鯺 ケ 沢	弁 財 船	1		橋 船	7
	間 瀬 船	1		漁 船	14
	図 合 船	4		秣 刈 船	2
	三 羽 船	23	大 間 越 町	丸 木 船	13
	橋 船	83	野 内 町	図 合 船	5
	丸 木 船	19		三 羽 船	2
	漁 船	34		橋 船	2
深 浦 町	弁 財 船	1	蟹 田 町	漁 船	42
	三 羽 船	2		図 合 船	3
	橋 船	22		三 羽 船	2
	丸 木 船	57		橋 船	4
	漁 船	22		漁 船	15
十 三 町	川 崎 船	4	今 別 町	図 合 船	19
	間 瀬 船	6		三 羽 船	17
	平 田 船	4		丸 木 船	6
	図 合 船	4		漁 船	99
	三 羽 船	11	合 計		719

弘前市立図書館八木橋文庫「九浦町中人別戸数諸工諸家業総括牒」（元治元年）より作成

表6 播磨屋六兵衛宛て証文一覧（田畑・山林関係）

年 代	件数	借入金	借用銭	そ の 他 の 借 用	引当（表中労働力とは仮子などの 労働を約束したことを示す）	借入人数	備 考
文政年間	1	6 両			家・畑・糸畑10枚	1	
天保年間	16	50両3歩	1貫936 匁	米5俵 （2石）	田8反6畝28歩、杉仕立山1カ 所、家屋敷9軒、畑6枚、山森 雇金1件、長糸畑1枚、畑7 件、畑1反、労働力1人	16	
弘化年間	1	20両			材木1件	1	
嘉永年間	9	79両2朱	9貫817 匁6歩2 厘	米2升	蔵屋敷1、家屋敷2、建家1、 酒屋株1、野畑1件、田2反9 畝20歩	11	
安政年間	20	105両	10貫966 匁4歩		田7町2反5畝10歩、杉山1、 檜材木1,000石、屋敷地2畝26 歩、建家1軒、杉山1件	20	
万延年間	8	なし	4貫237 匁6歩		田3町3反3畝、屋敷1、裏畑 4畝10歩、畑1カ所、建家1 軒、土蔵1軒、木小屋1カ所	8	借入金額不 明1件あり
文久年間	8	なし	250匁	米9.64石	田3町3反6畝4歩、田畑1町 2反1畝6歩	9	譲証文2件 は省いた
慶応年間	1	30両	なし		なし（利息2歩）	7	年貢不足金 の借用
不 明	9	7両	2貫747 匁7歩5 厘	米4俵 （1.6石）	田2町8反8畝、畑1件、船1 件、屋敷1件	9	
合 計	73	218両 3歩2朱	29貫955 匁3歩7 厘	米13.26 石		82	

表中、件数は面積・個数等が特定できないことを示す。